



編集長退任にあたって ～やっとかさ編集長を終えて～

4年間編集委員長を務めさせていただきました。良いニュースと悪いニュースがあります。どちらから書きましょうか？

良いニュースは、やはり、やっついて面白かったことと、そして役得がたくさんあったこと。編集委員は委員長を含め皆がボランティアです。報酬もないのに志願してやっているわけです。何かインセンティブがないとやってられません。編集委員の皆さんには2つの目的でやってほしいと言いました。1つは自分の分野の宣伝。多くの人に自分の分野を知ってもらい、うまくいけば研究仲間や研究資金増を狙うこと。研究会中心に構成されているWGの目的はまさにこれですね。研究資金といった世俗的利益でなくとも、自分の企画した特集で業界のオピニオンリーダ的役割を担えるというのはそれなりに楽しいものです。自分の研究分野ではなくとも、興味を持っている事柄の解説を企画／依頼できるというのも役得ですね。航空や鉄道の特集はそんな感じで組ませてもらいました。もう1つは、学会という勢力をうまく使って、個人的にはアプローチしにくい著者に書いてもらうこと。特に巻頭コラムでは学会からの依頼としてさまざまな分野の有名人にも登場していただきました。

初音ミクの特集が星雲賞を受賞して、広島でのSF大会まで表彰状を受け取りに行ったことも、SF好きの私としては役得だったと思っています。宿泊する時間的余裕がなく夜行特急で帰ってきましたが、これも鉄道好きの私としては役得でした。

悪いニュースは、やはり結構大変だったということです。新しい企画が切れないようにとか、記事内容が偏らないようにとか、いろいろ気を使いました。モニタコメントや評価には他の編集委員と一緒に一喜一憂しました。

私は検閲という行為が大嫌いなので、閲読の際にもそうならないように努力してきました。書き手の意

見は私のものと違ってそれぞれで受け入れるという方針です。しかし、会誌は広く会員への情報提供の場ですから単なる個人的意見を述べる場ではないことも事実です。この両者の線引きがなかなか難しいので悩んだことも多々あります。

それから、用語の問題。最多出は「IT技術」というのをどう扱うか問題。ITのTはTechnologyですから技術を付けると重なってしまいます。Fujiisan Mountainみたいなものです。でも、ITだけでは分からないから技術を付けるのだと主張なさる著者もいました。「EV車」というのと同様です。編集委員会の議論でも、じゃあ「JIS規格」はどうなのだ(SはStandardです)?という意見も出ました。これは言われるまで気づきませんでした。要するに慣れの問題も大きいようです。「IT技術」に関しては、最初のうちは指摘はするけど決断は著者におまかせという態度だったのですが、任期の最後の方ではもう諦めて、指摘もしないことにしていました。

用語のもう1つは固有名詞問題。会誌は広く客観的に解説する場ですから、特定の製品や企業名はできるだけ(少なくとも表題には)出さないようにしていただきました。「コーラ」はOKだけど「コカコーラ」や「ペプシ」はダメという判断です。しかし、「セロテープ」、「ホッチキス」、「セスナ」のように一般名詞化してしまっているものもあります(ちなみにセロテープは登録商標、ホッチキスは発明者名、セスナは製造メーカー名です)。これに類するものは良しとしました。これも線引きの難しい問題で、編集委員の皆さんの常識というか直感に頼る場面も多々ありました。

最後になりますが、さまざまな編集委員の方と議論できたことは大変良い経験になりました。4年間のお付き合い、ありがとうございました。知り合いの会員から会誌が面白くなったと声をかけてもらったのも励みになりました。次期編集長はもっと面白くしてくれることと期待してバトンタッチします。

(中島秀之／公立ほこだて未来大学)



編集委員退任にあたって

4年前、同じ研究会の仲間から、突然編集委員を頼まれた。「適任」という言葉にほだされたわけではないが、自身の忙しさを顧みず引き受けてしまった。折しも、情報処理学会創立50周年記念事業の「コンピュータ将棋プロジェクト」にかかわっていた私は、コンピュータ将棋のイベントを中心に会誌編集をしてほしいと言われ、コンピュータ将棋の進歩とともに編集に携わることとなった。

それまで一読者でしかなかった私は、ややもすると興味のある記事だけを飛ばし読みするだけであったが、編集会議に出席し、編集する立場に立ってみて、会誌を見る目が変わってきたと思う。ちょうど中島編集長と同じ任期であったが、この4年間、会誌は変革の時期であった。初音ミク特集記事やあから2010ペーパークラフトの会誌付録など、これまでの会誌には見られない試みに

携われたことは、貴重な体験であった。学会の会誌といえば、どうしても堅いイメージがつきものだったが、この数年でかなり身近なものになったのではないと思う。

次号が待ち遠しく、手にとってワクワクするマガジン、それが会員の求める会誌ではないだろうか？ それに少しでも近づくように、自身の担当した記事には、それなりの想いを込めて編集作業をしてきたつもりである。寝る間を削って、編集作業をした苦労も、今となっては貴重な体験だったと思っている。

今年1年、表紙の碁盤の選定とその解説は続ける予定だが、表紙の碁盤の局面が毎月変わっていることに気づいている会員がどれだけのいるのだろうか…、と密かにほくそ笑んでいる編集委員がいることを知っていただけると、また、会誌の見方も変わってくるのではなからうか。会誌には、間違い探しのような編集者の遊びゴコロが時々隠されている。隠しコマンドを見つけるように、会誌の隅にも目を向けてもらえると、また違った楽しみ方もできると思う。
(伊藤毅志/電気通信大学)



編集委員退任にあたって

情報処理学会誌。毎月送られてくるものの編集委員になる前は、そこに掲載された記事をあまり真面目に読んだことがありませんでした。毎月パラパラめくるものの、論文誌に掲載された論文を読み込むような真剣さとはほど遠い、あたかもコンビニで立ち読みするかのような気軽な気持ちで読んでいました。そんな私に会誌編集委員会のワーキンググループ委員へのお誘いがきたときははなはだ恐縮の思いで引き受けたことを記憶しています。私が所属していたワーキンググループはBWG/MWGといい、読者からの声を掲載する「会員の広場」の閲読を担当しています。会員の広場に寄せられる意見は、お褒めの言葉もあれば厳しいご意見もありましたが、いずれにしても毎号、記事に対して非常に的確なコメントが多数寄せられています。私は呑気にも「皆さんきちんと読んでるんだなあ」等と感心していたのですが、その一方で、お盆や正月付近の号ではコメントの数が他の号に比べて極端に少なかったりと「やっぱり皆さん、時間があるときに気軽に読んでるだけでしょ」と、内心で自分のこれまでの斜め読みを正当化したりもしていました。

ところで、紙面では説明の機会がないのでこの場を借りて、「会員の広場」の編集業務に関して少々書いておこうと思います。会員の広場は会誌読者から寄せられた記事に対するご意見を掲載するコーナーで、毎号2ページほどの紙面を割い

て掲載しています。紙面に限りがあるので、掲載するか否かの取捨選択が必要となる場面もありまして、匿名の意見より実名の意見を優先する、厳しいコメントはなるべく掲載する等、いくつかのルールによって、これを運用しています。また、いただいたご意見に対して趣旨が変わらないように注意しつつ文章を編集・校閲することも行っています。厳しいコメントを賜ったときに、その特集記事の関係者の回答を掲載すべきという意見もありましたが、会員の広場は議論の場ではなく、あくまで読者の自由な感想を掲載する場でありたいということで、現状では、皆様から寄せられた意見を掲載するという範囲にとどめております。ただし、寄せられたコメントと記事の評価は、単に紙面に掲載するだけでなく、毎月の編集委員会でも議題として取り上げておりますので、ぜひとも記事に対する率直なご意見を今後ともお寄せいただき、会誌を育てていただけましたら幸いです。

ともあれ、4年の任期の間、私自身も一読者として読者からの声に接することで、会誌の読み方を教わったような気がします。時流に乗ったさまざまな特集記事やコラムが矢継ぎ早に掲載され、「これは面白い」「これはつまらない」と気軽に読める会誌は、自分の専門分野以外の知識の引き出しを増やすのに非常にお手軽かつ有用だと思います。冒頭に告白したように、かつては単にぼーっと斜め読みをしていましたが、これからは、この編集委員の4年間の経験を活かした斜め読みをしていこうと考えています。
(横山昌平/静岡大学)





編集委員退任にあたって

2010年から4年間にわたり編集委員を務めておりましたが、この3月をもって退任させていただくこととなりました。

それまで、研究会や国際会議の運営に携わったり、論文誌の査読委員や編集委員を務めたり、といった形で学会活動にかかわることはありましたが、さて、会誌の編集委員というのはどういうものなのか、ピンとこないまま、初めて編集会議に出席した日のことを、懐かしく思い出します。

よく分からないまま、とりあえず編集会議にしてみると、皆さん、記事の企画案を巡り、活発に議論されていました。はじめは雰囲気は圧倒されていましたが、何度か会議に出席するうちに、どうやら企画案を出すことが、編集委員としての果たすべき最大の役割らしいと理解しました。理解したのはよいのですが、はたして、自分に多くの読者を惹きつける魅力的な記事を企画することなどできるのだろうか、と悩みは尽きません。

それでも、中島編集長からの「結局、自分が読みたいと思う記事を提案すればいいんです」というお言葉と、周囲の方々のご協力のおかげで、4年間の任期中にどうかいくつか企画案を提案し、記事の掲載にこぎつけることができました。

記事掲載までたどり着くのも一苦労ですが、掲載されたら掲載されたで、今度は読者皆さんからの反応が気になります。掲載からしばらくするとアンケート集計結果が届くのですが、当然よい反応ばかりとは限りません。今後のために、悪い反応も謙虚に認めなければと分かっている、自分の担当した記事の評価が低いとやっぱり落ち込んだりもしました。ちなみに、私が落ち込むかどうかはともかく、編集委員会で

は、皆さんからのアンケート結果を結構参考にさせていただいています。今後もいろいろと会誌へのご意見をお寄せいただければと思います。

さて、こんなふうな企画に携わってきた会誌ですが、正直に告白すれば、編集委員になるまでは、全体をばらばらめくる程度で、それほど熱心に読んでいたとはいえません。それでも、私にとってこの会誌「情報処理」はずっと特別な存在でした。

今から20年ほど前、当時まだ数学科の学生であった私は、たまたま近くにあった情報処理学会の会誌を手に取り、とある特集記事を目にしました。そこには、数学が、情報通信の信頼性や安全性を支える技術として、重要な役割を担っていることが書かれていました。その内容に興味を持った私は、その後就職し、セキュリティ分野の研究に従事し、そして結局、情報処理学会に入会するに至りました。学会入会後には決して熱心な会誌の読者とはいえなかった私ですが、入会のきっかけを作ったのはこの会誌「情報処理」だったのです。

昔の私に影響を与えたような、若い人に影響を与えることができる記事を企画できたら、という思いで、これまでやってきましたが、果たして実現できたでしょうか？ その答えは分かりませんが、4年間、会誌の編集に携わることができ大変光栄でした。中島編集長をはじめとする編集委員会の皆様、記事を寄稿して下さった執筆者の皆様、特集をまとめて下さったエディタの皆様、いつもいろいろ提出が遅れてご心配をおかけした事務局の皆様、そしてなにより、読者の皆様に、心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。今後ますます魅力的な会誌となることを、心より祈念申し上げます。 (宮崎邦彦／(株)日立製作所)

2014年度定時総会の開催について

会長 喜連川 優

2014年度定時総会を下記により開催いたします。総会の案内状は、5月中旬頃に法律上の社員である代表会員の皆様にお送りいたします。ご欠席の場合には、必ず委任状をご返送ください。

総会の議事議決権は代表会員の皆様有りますが、もちろん代表会員以外の正会員・名誉会員の皆様も、積極的に総会に出席してご発言いただきますようお願いいたします。

記

- 日 時 2014年6月4日(水) 16:00～18:15頃
 会 場 東京理科大学 神楽坂キャンパス (東京都新宿区神楽坂1-3)
 次 第 1. 2013年度に係る報告
 2. 新名誉会員の推薦
 3. 定款の変更および一般規則の改訂
 4. 新役員の選任
 5. 2014年度に係る計画(報告)
 6. 会費滞納会員の取り扱い(報告)
 7. 表彰(功績賞ほか)

※総会終了後、懇親会を行います。皆さまのご出席をお待ちしております。

照会先 一般社団法人情報処理学会管理部門